

事例

訪問看護における言語聴覚士(ST) 同行サービス

こうほうえん（鳥取県） 〒684-0063 鳥取県境港市誠道町2083番地 TEL 0859-45-6781

活動の概要

介護保険上、STによる単独訪問は加算対象となっていないが、在宅で生活されている脳血管障害のある方等に対し、STによる訪問リハビリは必要であると考え、訪問看護サービス提供時に併設施設のSTが同行することにより、在宅での嚥下リハビリ、口腔内ケアを実施し、ご利用者がより長く在宅で生活できるように支援します。

法人の概要

昭和5年設立以降、地域医療に貢献してきた米子脳病院（現広江病院）が現法人の母体となっています。昭和62年、当時事務長であった廣江研（現理事長）が、今後訪れるであろう高齢化社会に向け、本地域における老人ホームの必要性を強く感じ設立したのが本法人です。当時の境港市長である安田市長の強い要望もあり、境港市の誠道小学校横に特別養護老人ホームさかい幸朋苑を建設、世代間交流を重視した同地に法人を設置することとなりました。その後、特養、老健を中心とし、訪問介護、通所介護等在宅サービスを含めたトータル福祉サービス群を「ヘルスケアタウン」として、米子市に2群、鳥取市に1群、クックチル方式で食事を提供するヘルスケアフーズ、24時間保育所キッズタウン24を設置。現在、県内全域で定員数約1,600名の福祉サービス事業を営んでいます。

- 経営施設数…7（62事業）
- 法人全体の年間事業収入…5,020,210千円
- 主な経営施設
 - 介護老人福祉施設 さかい幸朋苑
昭和62年設立 定員170名
 - 介護老人福祉施設 よなご幸朋苑
平成5年設立 定員120名

- 介護老人福祉施設 なんぶ幸朋苑
平成8年設立 定員120名
- 介護老人福祉施設 新しいなば幸朋苑
平成12年設立 定員50名
- 介護老人保健施設 さかい幸朋苑
平成4年設立 定員50名
- 介護老人保健施設 なんぶ幸朋苑
平成8年設立 定員80名
- 介護老人保健施設 いなば幸朋苑
平成7年設立 定員100名

実施施設の概要

- 施設名…訪問看護ステーションさかい幸朋苑
- 施設種別…訪問看護ステーション

施設の運営方針

利用者が在宅で主体性を持ち、生活の質を高め健康の維持増進が図られるように援助します。また行政、医療機関、居宅介護支援事業者又は他職種と十分な連携を図り、適切な看護が提供できるように必要な知識及び技術を習得します。

活動の内容

- 活動対象者…脳梗塞等で嚥下困難となら
れている在宅の方
- 活動の頻度…週1回 1回あたり1時間
- 年間延利用者数…9名
- 活動開始年…平成8年

■活動開始の背景（取り組みの経緯）

高齢者や脳血管疾患後遺症のある方の症状として、嚥下障害、失語症を認めることが多く、更にこの症状により、窒息、誤嚥性肺炎、脱水、低栄養状態等を引き起こす危険性があります。また、コミュニケーションがとり辛く、本人が疎外感を持つケースも多くなっています。当ステーションでは、在宅における嚥下・口腔ケア、発声指導の必要性を認識し、平成8年より、関連病院の言語聴覚士（ST）との同行訪問を開始しました。介護保険導入以降は、併設施設にSTを配置し、本STとの同行訪問に切り替え（介護保険上、病院STとの同行訪問はできなくなったため）、継続して訪問を実施しています。

■人材・資金面等での工夫、苦慮

鳥取県特別医療費助成制度（身体障害者1・2級の方、難病の方に対し自己負担を免除する制度）があり、導入はスムーズに行うことができました。

STは併設施設の職員であるため、利用者・家族の負担にならない希望時間と、STの空き時間を調整し、看護師が同行して訪問しました。

また、利用者・家族間の交流目的でリクリエーション（絵画鑑賞・花見・梨狩り）を実施し、外出機会の少ない利用者・家族からは大変喜ばれました。

■利用者の声、地域の反応

73歳の脊髄小脳変性症を抱える女性で、声量低下、発話持続時間の低下、易疲労性が認められる方に対し、発声発語器官の運動、アセスメント法、歌による訓練を行いました。これにより、声量増加、発声持続時間の延長等の改善が認められ、ご利用者及びご家族から、「最近ではよく声が出るようになった」「笑顔が多くなった」といった声が聞かれました。

また、67歳の筋萎縮性索硬化症を抱える男性で、舌の可動域制限、開鼻声が認められる方に対し、発声発語器官の運動、ブローイング、軟口蓋へのアイシングの訓練を行いました。これにより、軟口蓋の挙上量の増加、開鼻声の減少が認められ、本人から「気持ちがいい」「治ったようだ」との発語が聞かれました。

活動の成果、地域の影響、今後の課題

本事業は、①実際に発話明瞭度が向上する等の効果があっただけでなく、②介護者に対しケアを行う上での口腔ケア・発声指導の重要性の意識付けを行うことができた、③同行する看護師の技術力向上に繋がった、等のメリットがありました。

しかし、依然としてSTの役割は一般的に認知度が低い傾向にあります。今後、ケアマネジャーや在宅介護支援センターの協力を得て、訪問STの認知度を上げることにより、在宅看護の質の向上を図っていきたいと考えます。